

# 保険前史の予備的考察

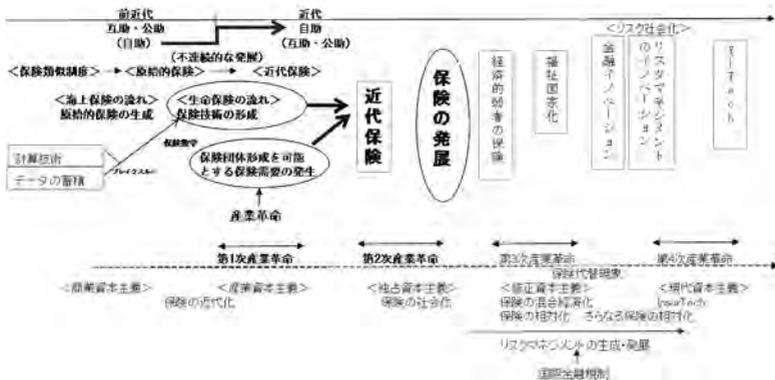
小川 浩 昭

## 目 次

1. 本稿の位置づけ
2. 保険前史の出発点
3. 文明の要素
4. 貨幣の起源

### 1. 本稿の位置づけ

小川 [2022] では、保険史考察の方法論について考察し、結論を「保険史の構図」として示した (図1 参照)。本稿は、その構図に基づく、主要な考察項目の一つである「保険前史」の考察である。



(出所) 小川 [2022] p.64、図10。

図1. 保険史の構図

本稿の位置づけを明確にするために、小川 [2022] で展開した筆者の保険史考察の特徴をまとめると、次のとおりである。

- (1) 保険は近代において生成・発展した経済的保障制度である
- (2) 経済的保障制度、経済的保障制度を形成する原理＝保障原理は超歴史的なものである
- (3) (1) から保険史は、保険生成史・保険発展史から成る
- (4) (1)、(2)、(3) から保険史は経済的保障制度史でなければならぬので、保険生成史は保険が生成した中世から近代への過渡期からの考察ではなく、それ以前の人類の歴史的全段階を含まなければならない。

(4) から保険史は人類の歴史的全段階を含まなければならず、前近代の考察を「保険前史」とした。本稿はこの保険前史の考察を行うことにあるが、小川 [2022] の保険史方法論の補強を兼ねて、保険前史に関わり、次の点を課題として設定したい。それは、保険史考察の出発点、すなわち、保険前史はどこから始めるべきかということである。

経済的保障制度を超歴史的なものとして捉え、保険を近代において生成・発展した経済的保障制度とすることは、経済的保障制度が人類の歴史的全段階のそれぞれの段階において必要とされるので、その時代の土台の社会経済に合致した、また、その時代の知識水準に応じた経済的保障制度として現れ、時代の変化とともに異なる経済的保障制度がそれぞれの時代に現れ、それが近代では保険として現れたという考え方である。したがって、経済的保障制度史としての保険史は人類の誕生から遡らなければならないが、人類の初期の時代は、経済的事柄が未分化で、むしろ、人類の生活においては非経済的事柄が多くを占めていた。さまざまな事柄が、徐々に専門性をもち、分化していき、経済的な事柄も分化していく。そのような経済的な事柄の分化として発生する各時代の個別具体的な経済的保障制度の考察を経済的保障制度史とするためには、経済的保障制度を超歴史的なものとして把握し、各時代の個別具体的な経済的保障制度を別な概念装置によって把握する必要がある。これを「保険類似制度」としよう。超歴史的

な経済的保障制度の歴史的な歩みを歴史的な概念である保険類似制度で把握し、近代では保険が発生したとするのであるから、保険類似制度は近代の経済的保障制度である保険に対して前近代の経済的保障制度となる。

経済的保障制度が人類の進化の過程で分化し、独立して保険類似制度として現れる。その様子の考察が保険前史の中心になるため、経済的保障制度の分化の過程で歴史的にある局面以降が保険前史の考察として意味を持ってこよう。だから、保険前史の出発点が問題となるのである。

経済的保障制度の分化が進み、保険類似制度としての把握が保険史として意味を成す局面を保険前史の出発点とすべきである。そのような局面は、経済的な事柄が社会の主要な分野の一つとなり、経済的保障制度を含む経済制度の分化が進展する局面である。それは、「革命」とよべるような歴史的なプレイクスルーがいくつも重なるような局面ではないか。経済的保障制度の分化がみられない人類の初期の時代は、極めて原始的な段階のため、人間の本能、人類の生活の工夫、社会の運営方法といった抽象的なものを保険類似制度と同様に把握せざるを得ないが、革命的な変化で経済的保障制度の分化も進む局面以降は、保険類似制度の把握がより具体的なものとなる。

ところで、保険類似制度とは、読んで字のごとく、「保険に似て非なるもの」である。保険学のテキストにおける定番の考察に、保険類似制度の考察がある。それは、保険がどういうものであるかを理解するための考察である。本来そのための基本的な方法は、保険を真正面から見据え、保険そのものの考察となり、それを保険本質論とすれば、保険類似制度の考察は、考察の視点を保険から距離を置き、他と比較することを通じて理解を深める考察である。日本人を理解するために、日本人そのものをひたすら考えるのではなく、外国人との比較を通じて、日本人の特徴を理解するという考察に等しい。

通常、貯蓄、自家保険、保証、賭博、講・無尽などが保険類似制度として取り上げられる。賭博以外は、保険と同様な保障機能を有するという点で保険に似ているが、異なる点も含むので保険類似制度といえるのに対し

て、賭博には保障機能はなく、存在するリスクに対応する保障に対して、賭博はリスクのないところにリスクを創造するという点で保障・保険と全く逆の性質を有するが、射幸性においては同じであるという点から、定番の保険類似制度とされる。賭博を外して、保障機能を有するという点では同じであるが異なるところもあるものを保険類似制度とすれば、保険類似制度がより限定され、理解が容易となるが、皮肉にも保険にとって必須の確率論は賭博から起こったこともあり、また、歴史的に保障制度としての保険の生成・保険の近代化には賭博性を排除することが中心の一つとなり、賭博は保険史にとっても非常に重要である。賭博の重要性から定番の保険類似制度の一つとされる。「賭博」と「保障」は対義語ではないが、リスクをめぐり正反対の性格を有し、歴史的に賭博性・投機性の排除が保険の近代化のカギを握るので、この点において賭博にも注目するが、前近代の保険類似制度としては、経済的保障を軸として歴史的考察を行うのであるから、経済的保障という保険と同様な機能を有するものの異なる点もみられるという「保険に似て非なるもの」を保険類似制度とする。ここで、「経済的保障」についても明らかにしておこう（小川 [2022]）。

保険は、火災による家の喪失、自動車事故による対物・対人の損害賠償請求や自分の自動車の修理費、人の死による葬儀費用や残された家族の生活費用等、偶然事象（発生確率は1でもいつ起こるかわからないという相対的偶然性を含む）による経済的ニーズ発生の可能性に対応する制度である。経済的ニーズ発生の可能性が「危険 (risk)」であり、危険に対応するとは、危険が発生しても経済的に回復できるようにしておくという状態を確保することである。この状態確保が「保障」である。保険はニーズを経済的な貨幣額で把握し、貨幣で保障を行う（貨幣に裏打ちされた現物給付、サービス給付を含む）経済的保障制度である。保険は貨幣が発達した貨幣経済である資本主義社会で生成・発展した。保険にとって貨幣は決定的に重要であることを強調しておく。

本稿では、保険前史の出発点を確定させるために、人類の誕生から遡る。それは、保険前史の出発点を求めて、「革命」とよべるような歴史的

なブレイクスルーがいくつも重なるような局面を探求することであり、それを「文明」とする。文明以前は、種の絶滅が意識され、その意味で生存すること自体が困難な段階でもあることから、その時代の環境に人々が適応して生存するための方法を「文化」（青柳 [2018] p.23）とし、生存を脅かす出来事が起こる可能性を「リスク」とすれば、原始的な文化は死亡リスクに対するリスクマネジメントとなり、原始的段階に保障機能を果たしたものを原始的段階の保険類似制度とすれば、それらはリスクマネジメントの一手段となる。

そして、文明を文化の発展段階として捉える。その時代の環境に人々が適応して生存するための方法である文化は、継承され、集団内に浸透して空気のようなになれば、倫理観、価値観となり、環境適応から解放される段階に至り、この段階の文化を「文明」とする（同pp.23-24）。この意味の文明を保険前史の出発点とし、本稿の結論とする。本稿はあくまでも予備的考察とし、保険前史の考察は別稿において行う。保険前史の考察のはじまりは、文明そのものの深い理解が前提となるので、「文明の要素」として文明について掘り下げた考察も予備的考察として行う。その際、文明の要素の一つといえる「貨幣」については、原始社会・未開社会の原始貨幣と文明社会の貨幣に分け、原始貨幣の起源は物々交換に求めるが文明社会の貨幣は商人が作ったとし、近年貨幣の起源に対して幅を利かしてきた「物々交換起源否定説」を批判して自説を述べ、文明の要素の考察を深める。

## 2. 保険前史の出発点

人類の誕生から遡り、人類の進化をみる場合、数百万年前に遡ることになるが、実年代の把握において、数十万年、数万年、異なる見解がみられることも珍しくないので、原則として、時期の把握は「世界史」のテキスト（木村ほか [2022]）を通説として採用することとする。

最古の人類（猿人）が出現したのが約700万年前であり、約200万年前には原人とよばれる進んだ人類が現れ、なかでもホモ=エレクトゥス（ジャ

ワ原人、北京原人など）は打製石器と火を使用して狩猟採集生活を営んだ（同pp.10-11）。約60万年前に、より進化した旧人が出現し、死者を埋葬する精神文化を発達させ、約20万年前には現生人類（ホモ＝サピエンス）に属する新人が現れた（同p.11）。人類の進化として要約すれば、猿人、原人、旧人、新人である。ただし、これはあくまでも発生の順番であって、一直線の系統図と捉えるべきではなく、複数の種が存在し、やがて新人のみとなった（Harari [2011]、柴田訳 [2016a] p.20）<sup>1)</sup>。

猿人はゴリラやチンパンジーの祖先たちと決別したヒト独自の展開であるが、その独自性、特徴として、直立二足歩行を指摘できる（青柳 [2018] pp.38-39）。これは人類が大きなりスクを負ったことを意味した。なぜならば、四足歩行の方が獲物の捕獲、外敵から身を守る上で有利なため、直立二足歩行は四足歩行を放棄することにより、肉食動物の格好の餌食となるリスクを負うからである（同p.39）。

しかし、二足歩行はリスクを負うが両手の開放を通じて進化圧をかけ、人類を進化させた（Harari [2011]、柴田訳 [2016a] pp.21-22）。自由な両手は、道具の使用、物の運搬を容易とし、物をくわえたり、獲物に噛みつくという口の役割が両手に委ねられることによって口腔内が広がり、舌が自由に動かせるようになり、言語が発生する道を切り拓いた（青柳 [2018] p.42）。

「直立したヒト」を意味するホモ＝エレクトゥスは身体が大型化し、脳も大型化したが、二足歩行に適した骨格への変化の過程で女性の産道が縮小したこともあり、胎児の頭蓋骨の大型化と産道の縮小から、未熟な段階で胎児が出産されることとなり、滋養供給のすべてを親に依存し、親の保護なくして生存できない「幼児期」の長期化、独り立ちするまで多くの時間を要する「成長遅滞」が原人の生活そのものに変化を迫ることになったとされる（同pp.44-46）。成長遅滞によって肉食動物の捕食対象となるヒ

1) ホモ＝サピエンス、ネアンデルタール人、デニソワ人という三種の人類は数十万年にわたって共存し、互いに交雑することによって共存していたとされる（篠田 [2022] p.61）。新型コロナウイルス感染症を重症化させる遺伝子が、ネアンデルタール人に由来する可能性も示されている（同 p.64）。

トの死亡率上昇というリスクに対して、多産と幼児を多く生存させるために、授乳期間後母親が妊娠しても母親以外の誰かが幼児の面倒をみる「共同保育」が行われ、それは複数家族が集まった「共同体」の形成を前提とした（同p.47）。自活できない子どもを連れてくる母親が自分と子どもを養うに十分な食べ物を一人で採集することはほぼ不可能であり、子育ては周囲の手助けを必要とした（Harari [2011]、柴田訳 [2016a] p.22）。共同体では、相互依存関係から共同保育をはじめとした相互扶助（互助）がみられる。この点から初期の共同体の組織原理は、互助であった。

原人は、ゾウ、ウマ、シカ、バイソン、マンモスなどの大型動物を食していたが、その捕獲には組織的な共同作業が必要であり（青柳 [2018] pp.56-57）、組織的な共同作業にも組織原理としての互助が働いていた。複数家族の集住、各種共同作業が行われ、男女の性別水平分業、世代ごとの垂直分業が見られるようになったが（同p.58）、分業は互助原理に支えられていたと言えよう。

幼児期の長期化に伴う幼児に対する教育期間、学習期間の長期化により、個人ごとの学習能力の優劣や環境の違いが多様な個人を作り出し、遺伝子上蓄えられた生存本能のプログラムよりも学習で獲得された生存のためのさまざまな工夫と方法が重要となることで、世代を超えて蓄積される生存のための記憶が集団装置として機能を開始し、継承されるべき一種の文化を形成した（同pp.48-49）。

この文化は、前述の通り、死亡リスクに対するリスクマネジメントとなり、原人の文化は学習で獲得した死亡リスクマネジメントが中心であることができよう。原人は、直立二足歩行により生じたさまざまな身体への変化を含む環境の変化から生じるリスクへの対応を進め、それが共同体を形成し、打製石器と火を使用した狩猟採集生活の営みとして現れ、極めて長い年月をかけてではあるが、旧石器時代として人類を進化させたといえる。すなわち、進化をもたらした互助原理に基づく共同体こそが保障として機能した、旧石器時代の保険類似制度である。

次に、旧人が出現する。代表的なネアンデルタール人は自分たちの遺

体を埋葬した。彼らが居住する洞窟に埋葬したため、動物の餌食になることもなく保存されることとなり、そのため数多くの骨が発見されている（同pp.61-62）。障害のある高齢のネアンデルタール人の骨も発見されており、埋葬された様子から、弱者を切り捨てることなく、集団の構成員として認知していたことが示唆され、集団に対する社会的認識と他の構成員との仲間意識があったと推定される（同p.60）。世界史のテキスト（木村ほか [2022]）では、「旧人は現代の人類とかわらぬ脳容積をもち、死者を埋葬するなど精神文化を発達させた」（同p.11）としつつ、ネアンデルタール人（旧人）の埋葬開始に宗教の起源を求めている（同p.419「世界史年表」）。異論もあるようであるが、テキストの指摘なので、一応これを通説として捉えたうえで、単なる埋葬ではなく、儀式的埋葬は生と死の区別、死後の世界を意識していたと思われるので、宗教の起源とできよう。

旧石器時代を前期、中期、後期に分ければ、原人の主たる活動期間は前期旧石器時代であり、ネアンデルタール人は中期旧石器時代となる。中期旧石器時代は、旧人の抽象的思考とそれに基づく行動が見られ、狩猟採集生活がより機能的となった（同pp.75-76）。抽象的思考は精神世界を発展させ、相互依存関係から発生した組織原理としての互助に、感情や思考が入ってきたと思われる。

後期旧石器時代は新人の活動期間となる。新人はホモ＝サピエンスに属し、人類として現代まで継続した系譜を示すことから、前期・中期旧石器時代に比べてヒトの進化が著しい。多くの沿海が凍結し、大陸と大陸が結び付いていた氷河期に各地に拡散する。新人は剥片石器を作る技術を進歩させ、骨角器を用いて生活を豊かにするとともに、優れた洞窟壁画を残した（木村ほか [2022] p.11）。洞窟壁画には動物は登場するが植物は登場しないことから、氷河期における動物相と密接に関連したとされ、氷河期に描かれたとされる（青柳 [2018] pp.96-97）。

後期旧石器時代は4.5万年前から1万年前とされるが、新人と併存したネアンデルタール人は約3万年前に絶滅した。絶滅の理由はわからないが、人類はホモ＝サピエンスのみとなった。

1万5千年前に最後の氷河期が終結すると、氷河期に狩猟していた大型動物の多くは北上して姿を消すか絶滅したため、獲物が不足し、その不足分を温暖化によって増大した植物性植物が補った(同p.99)。狩猟の獲物の減少を採集した植物が補った格好である。氷河期終了後主要な食物は植物に移行し、安定して食物を手に入れることができる場所に定住地を設けて住み、集落を形成するようになり、この定住化がやがて農耕を開始させる原動力となる(同pp100-102)。新石器の使用が始まり、それまでの狩猟採集による獲得経済から人類は農耕、牧畜生活の生産経済に入る。「人類のみが、食糧の生産に対して絶対的な支配を獲得した」という唯一の生物」(Morgan [1877]、青山訳 [1958] p.43)であるということの意味する画期的な変化であり、産業革命期と同様に人口増加が顕著に認められることから、チャイルドは「新石器革命」とよぶ(Childe [1936]、ねず訳 [1951a、b])。食糧確保の安定度が飛躍的に増し、飢え、栄養不足による死亡リスクが低下した。大地の恵みが保障の役割を果たすようになった。狩猟採集生活では人肉嗜食(cannibalism、カンニバリズム)が行われていたと言われるが、そのような慣習も消滅したであろう。

もっとも、獲得経済から生産経済への移行には5千年ぐらいかかっており、数千年かかった劇的な変化を近現代人が生み出した「革命」という用語で表現するのは不適切であるとして、「新石器革命」という用語を不適切とする批判がある(青柳 [2018] p.120)。短期間に起こった激しい変化という意味での急激な変化を「革命」とすれば、単に変化の大きさだけではなく、その変化が生じた時間も問題となるので、数千年という時間が短期間ではないならば、「新石器革命」などというべきではないのだろう。したがって、問題は数千年が長いか短いかにある。

感覚的に数千年という長さは、気の遠くなるような長さで、革命という用語とおよそ結びつかないほどの長時間である。チャイルドの新石器革命という用語が産業革命を意識した用語であることから産業革命について考えると、世界初のイギリス産業革命は1760年から1830年とされ、その約70年を最古の都市文明(紀元前3500年ごろシュメール文明)から現在までの

約5500年の歴史の中での注目すべき変化の一つとすると、その長さは、比率にして、1.27% (70年÷5500年) である。同様に獲得経済から生産経済への移行にかかった5000年は、人類の誕生まで遡った700万年という長さに対して0.07%である。新石器革命は、比率でみれば、産業革命よりも短期間であり、時間の尺度からも革命といえるのではないか。

当初の農法は、肥料を施さない、自然の雨にのみ基づく略奪農法であり、定住を特徴とする生産経済への移行とはいっても、土地が痩せると移動する必要がある、集落としては小規模であった。大河を利用する灌漑農法が行われるようになると生産は増加し、大河の治水・灌漑には大人数を必要とするので集落の規模は大きくなり、人口増加を伴った。生産力の増大から余剰生産物が形成され、手工業、他の共同体との交易が盛んとなり、農民以外の役人、商人、職人、兵士などが現れ、自給自足の村落から工業と貿易に依存する都市へと発達し、チャイルドはこの変化を「都市革命」とする (Childe [1936]、ねずまさし訳 [1951b] pp.58-118)。新石器革命が新石器時代に対応し、都市革命が青銅器時代に対応する。続く鉄器時代にはさらに分業が発達し、都市国家からそれらを束ねた国家が誕生する。

具体的にみると、エジプト、メソポタミア、インド、中国の大河流域で古代文明が発生し、インドを除くこれらの地域で専制君主の統治する国家が登場する。これらの古代文明の周辺には、その影響を受けながらも独自の世界を築き上げる諸文明が登場した。

以上のチャイルドの「新石器革命・都市革命」を基礎とした「文明の起源」について、新石器を重視することにより生産様式を重視した、また、農耕や牧畜が定住に先行し、文明の登場に連なるとする「新石器革命論」とし、そこには狩猟採集を行う遊動生活者が遊動するのは、定住生活の維持に十分な経済力を持たないから定住できなかったという見方が隠されており (西田 [2007] pp.16-17)、遊動を伴う獲得経済を定住を伴う生産経済よりも野蛮なものとして下に見る意識が働いているとの批判がある (同 p.14、pp.61-63)。

このような批判に基づき西田 [2007] は、定住という生活様式を重視した「定住革命論」を展開する。すなわち、「採集か農耕かということより遊動か定住かということの方が、より重大な意味を含んだ人類史的過程と考え、生産様式を重視する『新石器時代革命』（＝食料生産革命）論に対して生活様式を重視する『定住革命』の視点を提唱した」（同p.95）のである。氷河期から後氷河期に起こった気候変動で動植物環境が大きく変わり、狩猟に重点を置いた生活様式が破綻したとし、定住生活の発生を新石器革命による農耕・牧畜社会の成立ではなく、狩猟採集経済の破綻に求める（同pp.44-46）。

高等霊長類の出現以来、数千万年も続いた遊動生活の伝統に比べ、定住生活はわずか1万年にすぎず（同p.53）、それにもかかわらず、定住生活こそ人間本来の生き方と考える定住優越主義者が人類は長い間非定住を強いられたとするのに対して、「この1万年の人類の歴史は、その過程に新石器時代革命や、国家や文明の出現、市民革命、産業革命などを含みながらも、それらは全体として行方さだめぬ『定住革命』の過程をたどっている」（同p.68）とする。場所を移動すると見える風景が変わり、人はその場所を五感を研ぎ澄まして探索するが、定住者の見える風景は変わらないので、定住者は探索能力を失うことのないようにするために、行き場をなくした探索能力を集中させる別の場面を求めた結果、高度な工芸技術、複雑な政治システム、込み入った儀礼や複雑な宗教体系、芸能など、過剰な人の心理能力を吸収する様々な装置や場面がそれまでの人類の歴史とは異質な速度で拡大してきたとする（同pp.32-33）。定住民が「彼らの住む心理的空間を拡大し、複雑化し、そのなかを移動することによって感覚や脳を活性化させ、持てる情報処理能力を適度に働かせ（・・・中略・・・）退屈を回避する場面を用意することは、定住生活を維持する重要な条件であるとともに、それはまた、その後の人類史の異質な展開をもたらす原動力として働いてきた」（同p.33）とする。

「野蛮なものとして遊動を下に見る」、「人類にとって『定住』を当たり前のものと捉える」という常識的な観念に対して、遊動と定住の比較を

通じての批判は、迫力ある首尾一貫した論理的思考であるとの印象を持つが、上記の「場所を移動すると見える風景が変わり、人はその場所を五感を研ぎ澄まして探索するが、（・・・中略・・・）、過剰な人の心理能力を吸収する様々な装置や場面がそれまでの人類の歴史とは異質な速度で拡大してきた」とするのは、首尾一貫した議論というよりも飛躍した議論であり納得しがたい。生産力、人口増加という点からの革命論であるチャイルドの革命論の方が、論理的な説得力のある革命論であると考ええる。

しかも、チャイルドは「農耕の採用と定住生活の採用とを混同してはならない」（Childe [1936] ,ねず訳 [1951a] p.119）としており、定住革命論が批判するような農耕や牧畜が定住に先行したという単純な考えではない。狩人や漁業種族のなかに木造家屋からなる永住村落を持っていたものがあり、農耕のもっとも原始的な形態であるクワ耕作（菜園耕作）は地力を消耗させるため移動を余儀なくされるとしている（同訳pp.119-120）。定住革命論が批判するような単純な議論ではなく、多様性を受け入れた議論であり、産業革命を意識した革命論である。やはり、文明成立の革命的变化において重視すべきは、生産力、人口増加であり、獲得経済と生産経済の違いであろう。したがって、定住革命論のように「採集か農耕かということより遊動か定住かということの方が、より重大な意味を含んだ人類史的過程」とすることはできない。しかし、ここで重要なことは、遊動か定住かということも重大な意味を含んだ人類史的過程であるということである。すなわち、「採集か農耕か」、「遊動か定住か」、両者とも重大な意味を有する人類史的過程である。定住革命論ではこの点が重要であり、特に定住革命論を「保障」を意識してリスクに関わらせたとき、新石器革命論・都市革命論から一見導かれそうな「人類は大地の恵みによって死亡リスク・種の絶滅のリスクから解放された」との見方がいかに短絡的であるかが明らかにされる。この点から保険史において、定住革命論は有力な先行研究となり、ここでやや詳細に取り上げた次第である。それでは、定住革命論に拠りながら、遊動と定住のリスクについて考察しよう。

定住化を「逃げる社会から逃げない社会へ」、あるいは、「逃げられる

社会から逃げられない社会への変化」(西田 [2007] p.13)と捉えると、獲得経済を下に見ることに複雑な心境となる。そのために、遊動の利便性について考えてみよう。遊動の便利な点は、不都合なことがあれば、場所を移動して解決できるという点にある。「逃げる社会から逃げない社会へ」、「逃げられる社会から逃げられない社会へ」とは、何から逃げるあるいは逃げられるのか。言うまでもなく、不都合なことからである。不都合なことには、リスクも含まれよう。不都合なことを「将来に発生するかもしれない不都合なこと」と可能性の概念で把握すれば、リスクそのものといえる。したがって、遊動はリスクから「逃げる」、「逃げられる」、すなわち、「リスク回避できる」となる。野蛮な遊動を特徴とする獲得経済は、実は容易にリスク回避できる経済であった。逆に定住化によってリスク回避できなくなったことになる。このように読み解けば、リスクに対して定住化により人類は退化したかのようにみえるので、獲得経済を下に見ることに、複雑な心境となるのである。また、「人類は大地の恵みによって死亡リスク・種の絶滅のリスクから解放された」との見方が短絡的であると感ずる。

抽象的に遊動することの利便性を見たが、もっと具体的な次元で遊動する目的として整理してみよう(同pp.22-24)。主だった遊動の目的として次の点を指摘できる。

- (1) 食糧、飲料、原材料を獲得するため。
- (2) ゴミや排泄物の蓄積から逃れるため。
- (3) 風雨や洪水、寒冷、酷暑を避けるため。
- (4) 狩猟採集民の社会集団の成員間の不和の解消、他の集団との緊張から逃れるため。
- (5) 死あるいは死体から逃避するため。

(1) は飲食物を安定的に獲得するためであり、獲得経済たる所以である。農耕、牧畜生活に比べ食糧の自給力が劣り、食糧供給が不安定であることをリスクとすれば、遊動によってこのリスクに対応したとなる。

(2) は衛生や生活環境に関わることからであり、健康被害に通じる間

題でもある。今日風に言えば、環境汚染リスク、健康リスクに関わる。これが地球規模になれば今日の地球環境問題とも一脈通じる。環境汚染から逃げるための移動となるが、社会集団の大きさが地球規模の環境汚染をもたらす人口に比べ問題とならないような大きさなので、やがて環境汚染は自然が解決し、環境汚染として地球レベルの問題にはならなかった。すなわち、狩猟生活者の集団は今日の社会生活を行う上での各種集団に比べて規模が圧倒的に小さく、汚染された地域は程なく自然回復し、元に戻るため、環境問題とはならなかった。逆に言えば、定住生活が一般化し、人口が急増すれば、ゴミや排泄物の蓄積は地球レベルとなる可能性があり、化石燃料による地球温暖化と相まって、現在は地球環境問題にまできている。

(3) は、寒冷、酷暑による健康被害なども含めて気候変動によるリスクに関わるとすれば、気候変動リスク、自然災害リスクへの対応である。

(4) は、狩猟採集民の社会集団内外における暴力や戦争に発展しかねないもめごとが起こるかもしれないというリスクへの対応といえ、社会集団内では一種の治安維持であり、他の社会集団との間では戦争防止である。社会集団内のもめごとにおいては、移動に社会集団の分裂が伴うこともあった。他の社会集団との間は、社会集団の安全保障の問題であり、友好関係が結ばれるならば、交易相手となり、総合して、外交の問題である。

(5) は、人に恐怖感をもたらす死あるいは死体への対応である。遊動する社会においても死者を葬るということは見られたが、移動することで死あるいは死体と地縁的關係を持つことを避けることができる。定住生活では、死あるいは死体と地縁的關係を持たざるを得ず、定住者が採用した一般的な対応は、死者の住む領域として墓地を割り当て、死者と生者の住み分けを行うことである。遊動生活では、死者は埋葬して立ち去ればよかったが、定住は死者の傍らで共存することとなるので、死者への観念、さらには、死そのものへの観念をも変化させ、定住は血縁に基づく共同体を形成し、死者を先祖神として仰ぐ組織として再編成される（柄谷

[2015] p.68)。したがって、定住は人の死への観念にも変化をもたらした。

以上のような不都合な事柄から遊動社会は逃げる事ができる、リスク回避できる社会であった。加えて、遊動社会は遊動性から収穫物を備蓄することができず、私有する意味がないので全員に均等に分配してしまうという、収穫物の蓄積がない、明日を考えない経済である（同p.66）。明日を考える、将来を考えることでリスクが意識されるのであるから、明日を考えない経済を獲得経済とするならば、それはリスクをみない、リスクを感じない、主観的には保障と無縁の経済であるとなる。遊動で各種リスクを回避できたことになり、不十分ながらも遊動が保障を求める必要をなくす役割を果たしていたという意味で、保障と無縁であったのではない。もちろん、あらゆるリスクを回避できるわけではなく、原始社会、未開社会でのサバイバルにはリスクを伴うが、本能的な互助原理による共同体で対応した。定住生活は遊動という保障を必要としない生活ではなくなるから、保障が求められる生活、社会への移行を意味する。それは、リスクに引き付けられれば、前述のとおり、リスクに対して定住化により人類は退化したかのように見えるわけである。それでは、人類はリスクに対して、定住化により退化したのであろうか。

猿人、原人、新人というヒトの進化において、新人以外は絶滅した。遊動から定住化への移行は種の絶滅も発生したヒトの進化の過程の出来事であり、この進化の過程の人類にとってのリスクとは、死亡リスクと言っても誤りではないが、死亡リスクなどといった生易しいリスクではすまない「究極の種全体の死亡リスク」ともいうべき「種の絶滅リスク」である。したがって、生産力の飛躍的増大、それに伴う人口増加という定住革命を起こした人類の発展は、新人が絶滅リスクを克服したことを示す。遊動は絶滅リスクを移動により回避したと言え、リスクから逃げるばかりで、それを乗り越えるというものではなかったということである。猿人、原人、旧人は移動で絶滅リスクを回避できず、絶滅した。

定住革命は、新人が種の絶滅リスクを克服したという点でも革命的であ

るが、遊動によって逃げていたリスクから逃げない社会への移行を意味する。逃げる社会から逃げない社会への移行と捉えれば、人類はリスクに対して定住化により退化したのではなく、進化したのである。これは、「採集か農耕か」という観点からも導ける。

狩猟採集社会はその日暮らしと言え、明日を考えない、リスクを考えない社会であるのに対して、農耕社会は何か月にも及ぶ耕作に短期の収穫繁忙期が続き、季節の流れに沿った生産周期に基づき作業を行い、豊作の年、不作の年があるなど、未来を考慮しなければならず（Harari [2011]、柴田訳 [2016a] p.130）、不確実性という意味でのリスクを意識せずにいられない社会である。リスクは未来に関わることであり、保障は未来に関わる状態の確保を意味するから、未来を意識できない原始的な状態から未来を意識し、保障ニーズが発生する社会への進化である。

進化して種の絶滅リスクを克服した農耕社会・定住社会とはどのような社会であろうか。先に、文化をその時代の環境に人々が適応して生存するための方法とし、文明を集団内に浸透して空気のようになり環境適応から解放される段階に至った文化としたが、この定義に従えば、定住社会は種の絶滅リスクの克服という究極の「環境に適応して生存する」ことをやってのけた社会であり、種の存続という環境適応から解放された段階の社会であるから、正に文明社会である<sup>2)</sup>。かくして、保障ニーズを喚起することになった時代の画期を文明に求めることができるので、経済的保障制度史、したがって、保険前史の出発点を文明に求めることができる。経済的保障制度は超歴史的である、保障原理も超歴史的であるというとき、これらは時間を超えた次元の概念であるとするものの、文明成立以降の歴史を大前提とする。

---

2) ヒトの進化という過程で今日までを考えれば、文明成立後の数千年人類は絶滅せず存続し、大きな節目を形成したという点で絶滅リスクを克服した格好であるが、人の進化という数100万年単位で見れば、たった数千年で絶滅リスクを克服したとは言えないだろう。これから数100万年人類が存続するとは言いきれないからである。しかし、保険史の考察における出発点の議論においては、保険に関わる期間はせいぜい数千年になるので、「当面（数千年）絶滅リスクを克服した」とは言えよう。

### 3. 文明の要素

青柳 [2018] によれば、古代文明の成立過程についての従来の解釈は、次のように要約される。

「まず農耕の発展によって人口が増加し、やがて余剰生産物が生じるようになると、集落が大規模化し、大きくなった集落内でしだいに富が偏在するようになる。この富の偏在によって、社会的な階層化と職業の分化が進み、大規模集落とは性格を異にする都市という集住形態が生まれる。そして都市の形成とともに、さらなる社会的垂直化が進行して社会階級が生まれ、職業の専門化による人々の相互依存と相乗効果の度合いがさらに増す。この段階で、ほぼ文明が形成されたとみなされてきたとってよい。」 (同p.171)

このような解釈は、西アジア文明に焦点を当てた、メソポタミア文明の誕生と展開に基づく考え方であるので、アフリカ大陸、南北アメリカ大陸の文明に適用することは困難とされる (同p.171)。この点に注意しながら、上記要約から示唆される文明の要素について考えたい。そこで一般性・普遍性に注意をして、テキストの「世界史年表」 (木村ほか [2022] p.419) を考察の手掛かりとして、あらかじめ文明の要素の候補をあげておこう。新石器時代、青銅器時代、鉄器時代の「経済・社会・文化」について、表1のように整理されている。

表1. 文明の要素の候補

時 代	経済・社会・文化
新石器時代	農耕・牧畜開始・生産経済に入る 磨製石器・土器・織物・煉瓦・村落定住
青銅器時代	灌漑農業・犁耕・手工業・交易開始 青銅器・文字・神殿の出現 都市・階級の成立、奴隷の発生
鉄器時代	分業の発達、鉄器の普及 国家の成立

(出所) 木村ほか [2022] p.419 「世界史年表」を簡略化したもの。

新石器革命、都市革命、定住革命、農業革命、食糧革命など、何革命とするかは別として、文明成立には革命的变化を伴うが、本稿ではその変化により、人類の絶滅リスクを克服したという点から文明を捉えた。表1のような「文明の要素の候補」の累積的な発生により形成された文明において、特に重要な点は次の2点であると考ええる。農夫、牧人、漁師以外の食糧生産から解放された専門家を養うことができる余剰生産物の生産可能な生産力を持つ定住社会の形成、その社会の統治を行うための組織の登場である。端的に言えば、前者は都市の形成、後者は都市国家の形成、さらに、それらを束ねた国家の形成である。これは、「都市国家」に重点を置いた文明論である。

文明成立の大前提といえる生産力の発展において、定住革命に結び付く灌漑農業では、灌漑農業の管理運営が公共事業として求められ、その指揮者が共同体の頂点に立つ人物となるが、科学的思考がなされていない歴史的段階では、指揮者の指導力は宗教的なカリスマ性に依存し、神殿（表1参照）がつくられる。文明の要素の一つとして、神殿の出現がみられるのである。

神殿の周りに居住区が形成され、大規模化して都市が形成され、社会的分業（表1参照）が進み、前述の食糧生産から解放された専門家に加えて、公共事業のみならず社会全般の秩序維持を行う統治機関としての都市国家が形成され、その運営を担う指揮者が支配者層を成し、その下に神官層、役人層が形成され、人口の大部分を占める農民、手工業者、商人が一般層を占めるという垂直的な社会構造となり、階級（表1参照）が形成される。

狩猟採集時代から共同体間に交易が見られ、全ての共同体が同時期に農耕・牧畜に移行したわけではないから、遊牧民と農業共同体との間にも交易はみられた。社会的分業が進む都市化の過程で、専門化は自給自足の経済単位ではない専門家を発生させることによって、より複雑、高度な交易が求められ、都市国家内で交易（表1参照）が行われるようになり、都市国家間、あるいは、対外的な交易も活発化し、都市生活は工業と貿易へ依

存することとなる。

共同体間の争いも遊動社会の段階からみられるが、都市国家・定住社会では領土争いとしての戦争として先鋭化する。平和的な対外的な関りが交易とすれば、闘争的な対外的な関りが戦争である。都市化過程の共同体間、または、都市国家間の争いが戦争となると、敗れた側が奴隷（表1参照）となり、奴隷労働者が階級社会に組み込まれる。都市国家間の争いで都市国家が束ねられ、国家（表1参照）の成立となる。

メソポタミアでは、シュメール人が多くの都市国家を形成し、農産物は都市の神殿に納められたが、誰がどれだけ収めたかを記録するために記号をもって記録する「書記」が発明され、単調な記録以外も書き留めるために文字（表1参照）が発明され、楔形文字の書記体系となった（Harari [2011] 柴田訳 [2016a] pp.154-162）。楔形文字による法律、商取引に関連した文書、詩歌などの文学作品もある。メソポタミア文明に限らず文明にとって文字は重要であり、文字は文明の発展を促した。

以上のように、都市国家を軸として、表1の要素を文明の諸要素として指摘できるが、表1に欠けているものがある。それは、「商人」、「商業」、「市場」、「貨幣」の登場である。人間の共同生活の基礎をなす物質的財貨の生産・分配・消費の行為・生命維持活動を「経済」とすれば、これらの用語の登場は経済の分化を背景とする。都市、都市国家の成立は、政治、経済を分化独立させたので、文明の要素として、経済関連のものも重要である。この点について、考察しよう。

食糧生産から解放された専門家を養うことができる余剰生産物の生産可能な生産力を持つ、したがって、社会的分業が進んだ文明社会においては、余剰生産物の交換による物質的財貨の分配が行われることで経済が成立するため、大量な複雑かつ高度な交換が必要となり、経済が分化独立してくる。すなわち、経済の分化独立の鍵を握るのは、「交換」である。そもそも、交換はいかにして始まり、高度化することとなったのだろうか。

交換とは、両当事者間における相手に向けた双方の生産物の移動である。一方通行での生産物移動は「贈与」であり、双方向での生産物の移動

は「交換・交易」である。異なる人々の間の生産物の移動を「流通」とすれば、交換は流通現象である。交換が生じるのは、余剰生産物を所有する者が余剰生産物を提供してその代わりに自分の必要とする物を手に入れようとするためであり、このようなもの同士での余剰生産物の交換が成立することで、交換は成立する。したがって、交換の起源は余剰生産物の交換という物々交換である。

狩猟採集の原始社会は、生産力の低い、自給自足の経済であった。生産物はある特定の用途で用いられる有用性＝使用価値をもち、人はそれを入力して使用価値の恩恵にあずかる、すなわち、消費する。自給自足の経済とは、自分で生産（獲得）した生産物（獲物）を自ら消費するので、生産者＝消費者の経済である。ここでは生産物の流通現象は生じない。また、生活の単位は共同体であって、共同体内の異なる人々への生産物の移動は交換ではなく、ただの分配である。遊動社会の狩猟採集経済では、移動のために余剰生産物を保有できない。一時的に何か余剰生産物が発生しても、余剰生産物は共同体に所属するから、共同体の構成員間の交換ではなく共同体内の分配で消化されるので、余剰生産物の交換はない。したがって、交換の起源は共同体間の交換である。すなわち、交換の起源は、共同体間の余剰生産物の交換である。それでは、共同体間の余剰生産物の交換は、どのようにして始まったのか。

狩猟採集民の共同体が別の共同体と遭遇した場合、どのようなことが起こるのであろうか。初めて共同体同士が遭遇した場合、それを動物の群れとは異なる自分たちと同様な共同体と認識できるのかどうかということから問題となってくるのではないか。自分たちを守るために逃げるか、逆に自分たちを守るために先手必勝として攻撃するかのいずれかではないか。狩猟における動物の群れに対する対応と異ならないであろう。その当初の状態を考えるならば、共同体間の関係は自然状態にあって敵性状態であったとなろう。そうした偶然の共同体間の接触が重なり、やがて自分たち以外の共同体の存在を認識できるようになった段階が問題である。この段階を「初期状態」として考察の出発点にする。

他の共同体が持っている品物を略奪するために共同体と敵対し、戦いが行われるうちに、戦わずに平和的に品物を入手できるならば、その方がはるかに有利であるという経験を通じて、平和的な交渉が合理的な進歩として交易となり、かくして市場は敵対する共同体間に始まるという考えが、市場の起源に関する主たる学説とされる (Hoyt [1926]、中村訳 [1992] p.151)。ここでの「市場」という用語を「交換」に置き換え可能であるので、これを交換の起源の「略奪説」としよう。その特徴は、共同体間の初期状態は敵性状態であるという前提に立っていることである。

いかに平和的な交易が有用であるとしても、狩猟採集民の共同体間の初期状態を当初と同様に敵性状態とすれば、それはホブス『リヴァイヤサン』の自然状態との把握となる。周知のように、ホブスは第三者的権力である国家による自然状態の克服を考えたわけである。一方、その克服を平和的な贈与に求める主張がある。モース『贈与論』(Mauss [1925]、吉田＝江川訳 [2009]) であり、以来、贈与＝返礼という互酬性が注目され、未開社会の組織原理として互酬性原理が注目される。

モースは「未開社会」の初期状態としてホブス同様自然状態・敵性状態を想定するが、その克服・社会秩序の形成をホブスが国家に求めたのに対して、贈与に求めたと言える。初期の敵性状態において注意すべきは、互いの力が拮抗していることであり、だから先手必勝となり、戦争の機制となると考えるのがホブスであるとすれば、返り討ちにあうことを考えれば単純に先手必勝とはならず、むしろ先手必勝は無謀であり、衝突を避けるための贈与が行われたとするのがモースである。贈与が有効なのは、「与えることを拒み、招待を怠ることは、戦いを宣言するに等しい」(同訳p.39) からで、戦争を避けるために返礼が義務化する。ただし、受贈者は贈与者に属する物すべてに一種の所有権を持ち、この所有権に霊的な絆が示されるとして、義務化に霊的な側面も重視されている(同訳p.39)。

かれらが交換するのは、財産や富といった物だけではなく、礼儀、饗宴、儀礼、軍事活動、婦人、子ども、舞踊、祭礼、市(いち)であり、こ

のような給付と反対給付は、実際に義務的なものであり、これが実施されないと戦いがもたらされる（同訳pp.17-18）。

ここで注目されるのは、「市（いち）」の指摘である。祭りに伴って市が開催されるなどして、商品交換が盛んになされ、未開社会に商業、商人、商品、貨幣、市場が登場したといえるかどうかである。この点については、「贈与・交換の原則は（クラン間、家族間の）「全体的給付」（prestation totale）の段階を越えているが、純粹に個人的な契約、つまり貨幣が循環する市場、本来の意味での売買、とくに計算され、名前のついた貨幣で評価される価格の観念には達していなかった社会の原則である」（同訳p.115、傍点訳文のまま）とされていることから、未開社会での商業、商人、商品、貨幣、市場の成立とはならないだろう。未開社会において、贈与交換が安全保障の役割を果たし、交換を盛んにし、市（いち）が行われるほどであったが、商業、商人、商品、貨幣、市場の登場とまではいかなかった。

貨幣の登場とはならなかったとしたものの、共同体間の互酬的交換において貨幣が見られた。贈与交換における本質的な対象は一種の貨幣とされるほどである（同訳p.75）。腕輪、首飾り、銅板などが、富の表象としての貨幣であった。共同体内でも貨幣は同様に使われていたのではないか。原始共同体は、共通の祖先をもつ血縁集団である「氏族」、数グループの氏族を統合した「胞族」、数グループの胞族を統合した「部族」という社会組織なので（Morgan [1877]、青山訳 [1958] p.97）、共同体間とは異なる部族間を意味する。氏族、胞族は共同体内の組織であるが、共同体内でも、異なる氏族間、胞族間の結婚で家族の財産の相続が問題になるなど、すべからく共同体単位となる傾向がある原始社会で家族単位での財産の形成もみられ、財産の贈与交換を背景に富の印としての貨幣は登場していたと思われる。ただし、ここでの貨幣は、原始貨幣とすべきものである。貨幣については、文明社会の貨幣と原始社会の原始貨幣とに分類して考えるべきである。

原始貨幣と貨幣との違いは、言うまでもなく、原始貨幣の原始性にあ

る。貨幣の原始性とは、貨幣の働きに関わるものであろう。なぜならば、経済的には、「経済」という用語を使う必要のないような原始社会の経済における貨幣の働きは、経済が分化独立し、複雑高度化した文明の経済において期待される貨幣の働きと比べて、原始的であるということである。働きが問題であるから、端的に言って、貨幣の機能の問題である。

今日の貨幣の機能は、交換手段機能、支払手段機能、価値尺度機能、価値保蔵機能であり、文明社会の貨幣はこれらの機能を有しているのに対して、原始貨幣の原始性とは、これらすべての機能を果たしていないという点で働きが劣るということである。上記の富の印としての貨幣は、物としての貨幣が財宝として保有されることとなるのであろうから、貨幣の価値保蔵機能に結び付く。また、物としての貨幣それ自体に価値があることは、貨幣を蓄積することが直接富の蓄積を意味し、社会的威信を高めることになった。争いの調停、規則違反に対する贖罪、祭祀における供物としても使われており、社会秩序の維持に使われていた（古川 [2018] pp.55-56）。保険金という貨幣の給付で保障機能を果たす保険と一脈通じる貨幣の働きである。義務的返礼において貨幣を使えば、一種の債務の履行であるから、貨幣の支払手段機能が発揮されている。しかし、活発な商品売買により市場が形成され、複雑高度な交換が行われるわけではないので、価値尺度機能、交換手段機能の働きは、あまり必要とされない。特に「本来の意味での売買、とくに計算され、名前のついた貨幣で評価される価格の観念には達していなかった」という上記引用文は、価値尺度機能がなかったとの指摘に他ならない。

これに対して、文明社会では、貨幣は全ての機能が求められる。文明社会では、社会的分業が進むことにより、さまざまな物の交換の必要性が高まるが、そのような大量な複雑かつ高度な交換を商人・貨幣が仲介して行っている。商品に価格がつけられ、商品売買として盛んに貨幣と交換されていることから、貨幣の価値尺度機能、交換手段機能がいかんなく発揮されている。貨幣の機能を発揮するために、保蔵が容易で損耗を被りにくい、富の印としても相応しい、貴金属が貨幣となる。いわゆる金属貨幣で

あるが、文字、数字で記録することで成り立つ信用取引も、初期から行われていた。いずれにしても、今日の貨幣と同様な機能を果たす貨幣が文明社会で登場した。

貨幣の登場は保険史にとって極めて重要である。それは、貨幣経済であることが、保険生成の前提の一つであるからである。貨幣の価値尺度機能が発揮されることで保険の対象である「保険の目的」を金銭的に評価でき、保険価額、保険金額を設定できる。貨幣の交換手段機能により現物給付の制約から解放され、現金給付が可能となる。貨幣の支払手段機能、価値保蔵機能により、前払確定保険料方式が可能となる。保険は、貨幣の機能が発揮されることにより成立する貨幣制度である。ただし、その成立には、資本主義社会のように全面的に貨幣経済が発達すること、確率論などの数学の発展、自己責任原則の一般化などの条件も必要なため、それらの条件が揃う近代資本主義社会まで保険は生成しなかった。

保険を近代合理主義的な、確率計算等の発達した数学を使用する科学的な経済的保障制度であるとすると、前近代の保険類似制度は、非合理的、非科学的という点で前近代的であった。原始貨幣の段階で復讐の連鎖を断ち切るために損害賠償として渡された原始貨幣は、貨幣そのものが保障手段といえたが、貨幣の機能の全面開花による近代的な合理的、科学的制度に対して原始的ではあるが、さまざまな面に保障機能を果たす保険類似制度が登場した。保険類似制度にとって、貨幣は生みの親と言ってよい存在であった。

経済を分化独立させた商業、商品、商人、貨幣、市場は、密接な相互関連をもつ文明の要素である。用語を定義することで、これらの用語の密接な相互関連を具体的にみよう。食糧生産から解放された専門家を養うことができる余剰生産物の生産可能な生産力を持つ、したがって、社会的分業が進んだ文明社会においては、余剰生産物の交換による物質的財貨の分配が行われることで経済が成立するため、大量な複雑かつ高度な交換が必要となり、商業、商品、商人、貨幣、市場の登場で経済が分化独立していく。「商品」とは生産物であるが、ただの生産物ではなく、当初から交換

することを目的とした生産物のことである。したがって、商品は使用価値の他に交換価値を有する。文明社会では、商品の交換は交換相手がいることで成立するがその保証はないということが物々交換の矛盾となり、この矛盾を打開するために、あらゆる商品と交換可能な貨幣の交換手段機能が発揮され、貨幣が商品交換を媒介し、商品「交換」に対する必要性が商品「売買」に転化する。交易の高度化・活発化は商品売買への転化、さらには商品売買の活発化であり、商品を売却して貨幣に、その貨幣で別の商品を購入して、という商品の姿態変換の系列が続き、この連鎖の総体が商品流通であり、この連鎖の社会的領域が「市場」である（久保村＝荒川編 [1974] p.5）。物々交換に内在していた矛盾は貨幣によって完全に止揚されたわけではなく、「商品にとって販売は必須なのに、貨幣にとって購買は必須でない」という形で現れ、この矛盾を止揚するものとして、交換価値を指向する売買を専有の機能とする特殊な階層の「商人」が出現する（同p.6）。そして、商人による商品売買を行う事業としての「商業」が成立する。

なお、この商業の定義は、農業、工業などと並立して商業を捉える狭義の意味である。したがって、金融業、保険業、運送業、倉庫業などはこの意味の商業には含まれず、商業を助成する事業として位置づけられる。商業を狭義に捉えた場合、文明社会における商業の発生は、商業を助成するものとして保険のような事業＝保険類似制度の発生の可能性を示す。

経済を分化させる文明の要素は、保険類似制度の生成を通じて経済的保障制度を分化させる。

#### 4. 貨幣の起源

貨幣は、保険にとって最も重要な文明の要素の一つと言っても過言ではなく、その起源についての議論は、既に展開した文明の要素の議論の補強となる。近年幅を利かせてきた貨幣の起源についての物々交換起源否定説と筆者の見解が対立することから、この批判を通じて貨幣の起源を論じ、上記の文明の要素の議論の補強をしたい。

貨幣の起源を物々交換に求めるのが「物々交換起源説」であり、アリストテレス、スミス、マルクスなど錚々たるメンバーが指示する通説である。21世紀になって物々交換起源説を否定する見解が有力となってきた。最近の「起源」と名の付く書物、たとえば、大沢 [2022] を見ても、貨幣の起源については、「物々交換起源否定説」が目につく。筆者は物々交換起源説に立つが、原始貨幣と貨幣を分けて捉える物々交換起源説なので通説と異なる。物々交換起源否定説への批判を通じて、筆者の見解を示す。

Martin [2013] (遠藤訳 [2014]) を引いて、物々交換起源否定説をみてみよう。ヤップ島で見つかったお金、直径が最大で4メートル弱の石のお金「フェイ」を根拠に、物々交換の不便を乗り越えるために貝や石などの持ち運びも便利な物品貨幣から貨幣が発達していったという物々交換起源説を否定し、ヤップ島の貨幣はフェイではなく、その根底にある債権と債務を管理しやすくするための信用取引・清算システムとし、フェイは信用取引の帳簿を付けるための代用貨幣（トークン）に過ぎないとする物々交換起源否定説 (Martin [2013]、遠藤訳 [2014] p.20) となっている。すなわち、貨幣の起源を債権債務、ないしは、信用に求める「貨幣信用理論」である。貨幣信用理論の主唱者イネス<sup>3)</sup>によれば、「信用、信用のみが貨幣である」 (Innes [1913] p.392) とされる。

また、物々交換起源説については人類学からの批判が活発であり、Graeber [2011] ではイネスの賛同者＝信用論者たちは「貨幣は商品ではなく計算手段である」とし、自身は、「貨幣が尺度にすぎないなら、それはなにを測定するのか？ 答えは単純だ。負債である」として、貨幣を負債を測定するための尺度としつつ (Graeber [2011]、酒井監訳 [2016] p.69-70)、物々交換自体が行われた証拠がないと批判する (同訳p.45)。貨幣の発達についても、物々交換起源説に基づくように「物々交換からはじまって、貨幣が発見され、そのあとで次第に信用システムが発展した」わ

3) 福留 [2021] p.117、脚注1において、Innesの発音は [inis, iniz] とされ、日本語表記では「イニス」あるいは「イニズ」が適しているとして「イニス」を使用しているが、本文中の引用文献との関係から、本稿では「イネス」とする。

けではなく、全く逆方向であるとされる（同訳p.63）。

それでは物々交換起源否定説を踏まえて、貨幣の起源について考えてい。まず、フェイについてである。観察されたヤップ島は、農業が行われておらず、魚、ヤシの実、贅沢品のナマコの3つだけが商品の「原初的な状況」にあったとされる（Martin [2013]、遠藤訳 [2014] pp.5-6）。

「原初的な状況」とはどのような状況なのだろうか。Martin [2013] では、島の外の人間とは接触も交易もない単純な経済とし、物々交換さえ見込めない非常に遅れた社会としているので、文明登場以前の原始社会、未開社会を指しているものと思われる。そうであれば、農耕社会前の狩猟採集経済による自給自足経済を意味し、社会は原始的な共同体によって形成されていた。原始社会、未開社会を原初的な状況とした場合、まず浮かぶ疑問は、商品が存在するのだろうかということである。商品は、社会的分業による余剰生産物が形成されなければ登場しないだろう。なぜならば、そのような状況にならなければ、物財を売る必要も買う必要もなく、つまりは商品を売買する必要が、したがって商品の存在を必要としないからである。魚、ヤシの実、贅沢品のナマコの3つだけが商品ということは、魚だけをひたすらとり、自分が消費する以上に魚を取る専門家・漁師、ヤシの実だけをひたすらとり、自分で消費する以上にヤシの実をとる専門家・ヤシの実屋、ナマコをひたすらとり、自分で消費する以上にナマコをとる専門家・ナマコ屋の3つの専門職があり、自分が消費する以上の余剰生産物をもとに自分が欲しいものと交換する必要がある専門家が存在することになる。3つだけの商品による原初的な状況というのは、このような滑稽な社会的分業が進んだ状況を想定することを意味する。そもそも、物々交換さえ見込めないような遅れている社会で、なぜ商品が成立するのか。物々交換さえ見込めないのだから、高度な商品交換などできるわけがない。

原始社会、原始共同体でも分業は行われるが、互助原理による共同体としての生産性の向上のためであり、そこには私的な、あるいは専門家のための分業を前提とした商品は登場しない。仮に、共同体的分業として、漁

師、ヤシの実屋、ナマコ屋に分業がおこなわれたとしても、それぞれの専門家の余剰生産物は共同体としての余剰となり、物々交換の根拠となる余剰生産物の交換の必要がない。そもそも、遊動社会の狩猟採集経済では、移動のために余剰生産物を保有できない。仮に、一時的に何か余剰生産物が発生しても、恒常的な交換に発展するような交換が行われるような量ではないであろうし、繰り返しになるが、余剰生産物は共同体に所属するから共同体の構成員間の交換ではなく共同体内での分配で消化されるので、余剰生産物の交換はない。したがって、貨幣は必要とされない。先の交換の議論で交換は共同体間で行われると強調した所以である。共同体間の交換において、物々交換が行われず、いきなり信用が前提とされて貨幣が発生したのだろうか。物々交換を表す英語 ‘barter’ が古期フランス語の「だます」を意味する言葉に由来する (Orrell [2020]、角訳 [2021] p.20) ことからすれば、物々交換から始まったとできそうである。

ヤップ島という島のなかで人の移動があっても、島に定住していると見做せば定住生活ともいえ、ヤップ島の状況というのは、「原初的な状況」＝原始社会・未開社会と一般論で片付けられない特殊な状況になるのかもしれない。したがって、商品が存在していたというならば、原初的な状況ではない、特殊ヤップ島的な状況が影響していたのかもしれない。もし、そうだとすれば、単純に一般化、理論化できない特殊な例を引いて、物々交換起源説を否定しているのがヤップ島のフェイとなる。最近のFinTech関連の文献でも、貨幣の起源を信用に求めた方が仮想通貨の説明がわかりやすくなるためか、ヤップ島のフェイを取り上げて「貨幣は記録に過ぎない」といった物々交換起源説を否定する文献が散見されるが、貨幣信用理論に注目するのはよいとして、ヤップ島のフェイの例は一般化できない。ヤップ島の石貨は、冠婚葬祭時の一種の儀礼的な贈答品として使用されてきたとして、貨幣とできるか微妙であるとの指摘 (古川 [2018] p.54) もあり、フェイで貨幣の物々交換起源説が否定されるとするのは無理がある。

ヤップ島のフェイに比べて説得力があるのが、物々交換自体が行われた

証拠がないという批判である。人類学者に「物々交換の証拠がこれだけ探しても出てこないのだから、物々交換は行われていない」と言われてしまうと、経済学者がスミスやマルクスを信じて「証拠が発見されていないだけではないか」という反論をしても、不毛な議論となってしまう。もっとも、人類学者は、未開社会では物々交換が行われていたことを認めており、完全に物々交換を否定するわけではないが、これらの物々交換は継続的関係を持つことのないよそ者同士で行われ、スミスが想定しているような物々交換ではないとして、貨幣の物々交換起源説が否定される（Graeber [2011]、酒井監訳 [2016] pp.45-55）。

ここで重要なことは、未開社会で物々交換が行われたことであり、人類学者が否定できるのは、スミスの物々交換起源説に過ぎないということである。換言すれば、Graeber [2011] の誤りは、なぜ貨幣が必要とされるかの理解を欠いたまま原始貨幣を貨幣として考察を行っていること、そのことからスミスの誤っている物々交換説を批判していることである。貨幣が必要とされるのは、余剰生産物の交換のためである。自給自足経済で基本的に余剰生産物のない原始社会でも、上記の通り共同体間に交換は行われる。そのことを人類学者も認めている。必要とする物同士の交換となれば、いわゆる「欲望の二重の一致」が問題となるが、この交換は互酬的贈与である。すなわち、交換の起源は共同体間にあり、それを個人間に求めているスミス（Smith [1789]、大河内監訳 [1978] pp.39-51）は誤っている。その誤ったスミスを批判して、交換が行われるのは継続的関係を持たないよそ者同士であると批判しても、物々交換を起源とすることに対する批判にはならない。よそ者同士である共同体間の互酬的贈与が交換の起源だからである。必要とする物の交換ではないから、欲望の二重の一致も問題とならない。

原始社会での交換は個人間ではなく、共同体間にみられるが、文明社会では都市国家内でも食糧生産者以外の専門家の発生、これら専門家も含めた社会的分業の進展による余剰生産物の形成によって、複雑、大量な余剰生産物の交換が必要となり、それを可能とするために余剰生産物を商品と

して扱う専門家が商人として登場し、商業を行う。そして、複雑、大量な余剰生産物の交換を可能とするためには商品売買が必要であり、貨幣が必要である。交換が物々交換から始まり不便なので貨幣が生み出されたのではなく、人々が必要なものを入手したいという必要性に対して、つまりは、潜在的な物々交換の必要性に対して、貨幣で商品売買を行う商人が現れ、複雑高度な交換を可能とした。この点に着目すれば、貨幣は商人が作ったといえる。

繰り返しになるが、貨幣の物々交換起源否定説の誤りは、なぜ貨幣が必要とされるかの理解を欠いたまま原始貨幣を貨幣として考察を行っていること、そのことからスミスの誤っている物々交換説を批判していることである。貨幣が必要とされるのは、余剰生産物の交換のためである。自給自足経済で基本的に余剰生産物のない原始社会でも、上記の通り共同体間に交換は行われる。そのことを人類学者も認めている。必要とする物同士の交換となれば「欲望の二重の一致」が問題となるが、この交換は互酬的贈与である。共同体間の互酬的贈与で富の象徴として貨幣の一部の機能を果たす原始貨幣が登場し、共同体内でも財産として相続され、復讐の連鎖の防止のために損害賠償としても使用された。損害賠償としての使用は、保障機能を果たしているといえ、この点において原始貨幣は原始社会の保険類似制度といえる。文明社会では、貨幣の全機能、特に、価値尺度機能、交換手段機能を全面展開させる貨幣を商人が作った。かくして、貨幣の起源は文明社会における余剰生産物の交換にある。

原始社会では貨幣（原始貨幣）自体が保険類似制度であったが、文明社会ではその貨幣を使った保険類似制度が登場する。この点についての考察が保険前史の考察となるので、別稿において行うこととする。

## 参考文献

- 青柳正規 [2018] , 『興亡の世界史 人類文明の黎明と暮れ方』講談社。  
Childe, Vere Gordon [1936] , *Man makes himself*, London, Watts [ねずまさし訳 [1951a] , 『文明の起源 上』岩波書店、ねずまさし訳

- [1951b] , 『文明の起源 下』 岩波書店] .
- 福留久大 [2021] , 「イニスの貨幣＝信用論——或る空論の批判的検討」  
『経済学研究』 88(1)、 pp.117-142。
- 古川顕 [2018] , 「原始貨幣と貨幣の起源」 『甲南経済学論集』 59 (1・2) 、  
pp.47-118。
- Graeber, David [2011] , *Debt: The First 5,000Years*, updated and expanded  
edition, Melville House Publishing [酒井隆史監訳 [2016] , 『負債論  
——貨幣と暴力の5000年』 以文社] .
- Harari, Yuval Noah [2011] , *Sapiens : A Brief History of Humankind*, New  
York, HarperCollins [柴田裕之訳 [2016a] , 『サピエンス全史 (上) 』  
河出書房新社、柴田裕之訳 [2016b] , 『サピエンス全史 (下) 』 河出  
書房新社] .
- Hoyt, Elizabeth Ellis [1926] , *Primitive Trade, its Psychology and Economics*,  
London [中村勝訳 [1992] , 『交換のアンソロポロジー——その原始心  
性と経済の統合』 晃洋書房] .
- Innes, Alfred Mitchell [1913] , “What is Money?” in *The Banking Law Journal*,  
May 1913, pp.377-408.
- 柄谷行人 『世界史の構造』 岩波書店。
- 木村靖二＝岸本美緒＝小松久男ほか 6 名 [2022] , 『詳説世界史』 改訂版、  
山川出版社。
- 久保村隆祐＝荒川祐吉編 [1974] , 『商業学』 有斐閣。
- Martin, Felix [2013] , *Money : The Unauthorised Biography*, The Bodley  
Head, London [遠藤真美訳 [2014] , 『21世紀の貨幣論』 東洋経済新報  
社] .
- Mauss, Marcel [1925] , *Essai sur le don: forme et raison de l'échange dans  
les sociétés archaïques*, *L'Année Sociologiques*, nouvelle série, 1 [吉田昇  
吾＝江川純一訳 [2009] , 『贈与論』 筑摩書房] .
- Morgan, Lewis Henry [1877] , *Ancient Society or Researches in the Lines of  
Human Progress from Savagery through Barbarism to Civilization* [青山

- 道夫訳 [1958] , 『古代社会』 上巻、岩波書店、青山道夫訳 [1961] ,  
『古代社会』 下巻、岩波書店] .
- 西田正規 [2007] , 『人類史のなかの定住革命』 講談社。
- 小川浩昭 [2022] , 「保険史考察の方法」『生命保険論集』 218、pp.33-66。
- 大沢真幸 [2022] , 『経済の起源』 岩波書店。
- Orrell, David [2020] , *A Brief History of Money: 4000 Years of Markets, Currencies, Debt and Crisis*, London, Wellbeckt [角敦子訳 [2021] , 『貨幣の歴史』 原書房] .
- 篠田謙一 [2022] , 『人類の起源——古代DNAが語るホモ・サピエンスの「大いなる旅」』 中央公論新社。
- Smith, Adam [1789] , *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, in three volumes, the fifth edition, London, A.Strahan and T.Cadell [大河内一男監訳 [1978] , 『国富論 I』 中央公論社] .

(2022年10月稿)